

奥山廻役の邸宅

(浮田家)

浮田家は、戦国武将の宇喜田秀家の子孫と伝えられる旧家で、江戸初期より代々奥山廻役を務めた。奥山廻役とは、立山黒部一帯の山林保護や国境警備を任務とした役職である。現建物は代官になった文政10年(1827)の翌年に役宅を兼ねて建てられたものである。

屋敷の周囲には濠と屋敷林をめぐらし、表門を構えて板塀をまわしている。主屋の座敷前には池泉庭園をつくり、主屋の後には土蔵がある。

平面は桁行31mと細長く、右側には土間と馬屋、中央を広間にしてその正面には式台(賓客玄関)ある。左側には座敷や、後に増築された新座敷がある。かつて主屋と同じ規模の建物が背後にあり、台所部を挟んでH型の配置になっていたが、昭和16年(1941)に撤去されて現在の姿になった。

外観は、屋根が寄棟造りの茅葺きで、その正面を石置き板葺きとし、さらに1段下って同じ石置き板葺きの下屋が付いた特異なものである。代官屋敷でもありながら、農村や山村の趣を随所に生かした数寄的な建築意匠である。

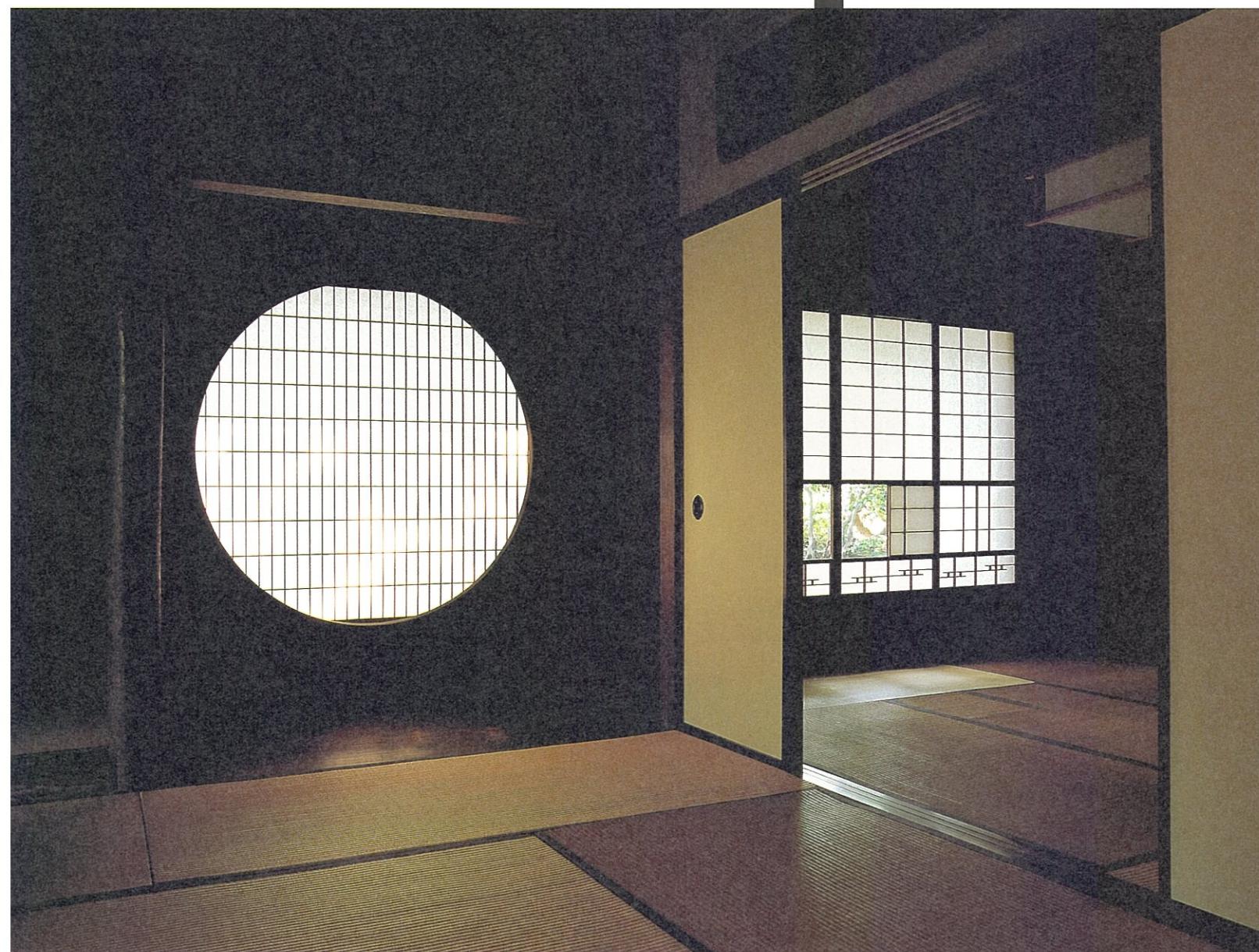
室内は24畳の広間と台所が豪壮な梁組みの「梓の内」と呼ばれる構造である。大梁は櫛材が用いられ、広間の梁や化粧貫などの木組みは贅沢な透漆(すきうるし)で仕上げられている。



深い軒をつくりだすための出桁構造と持送り、そして柱腰板や白壁、格子などが、茅葺き・石置き板葺き屋根と調和して独特の美しさを醸し出している。

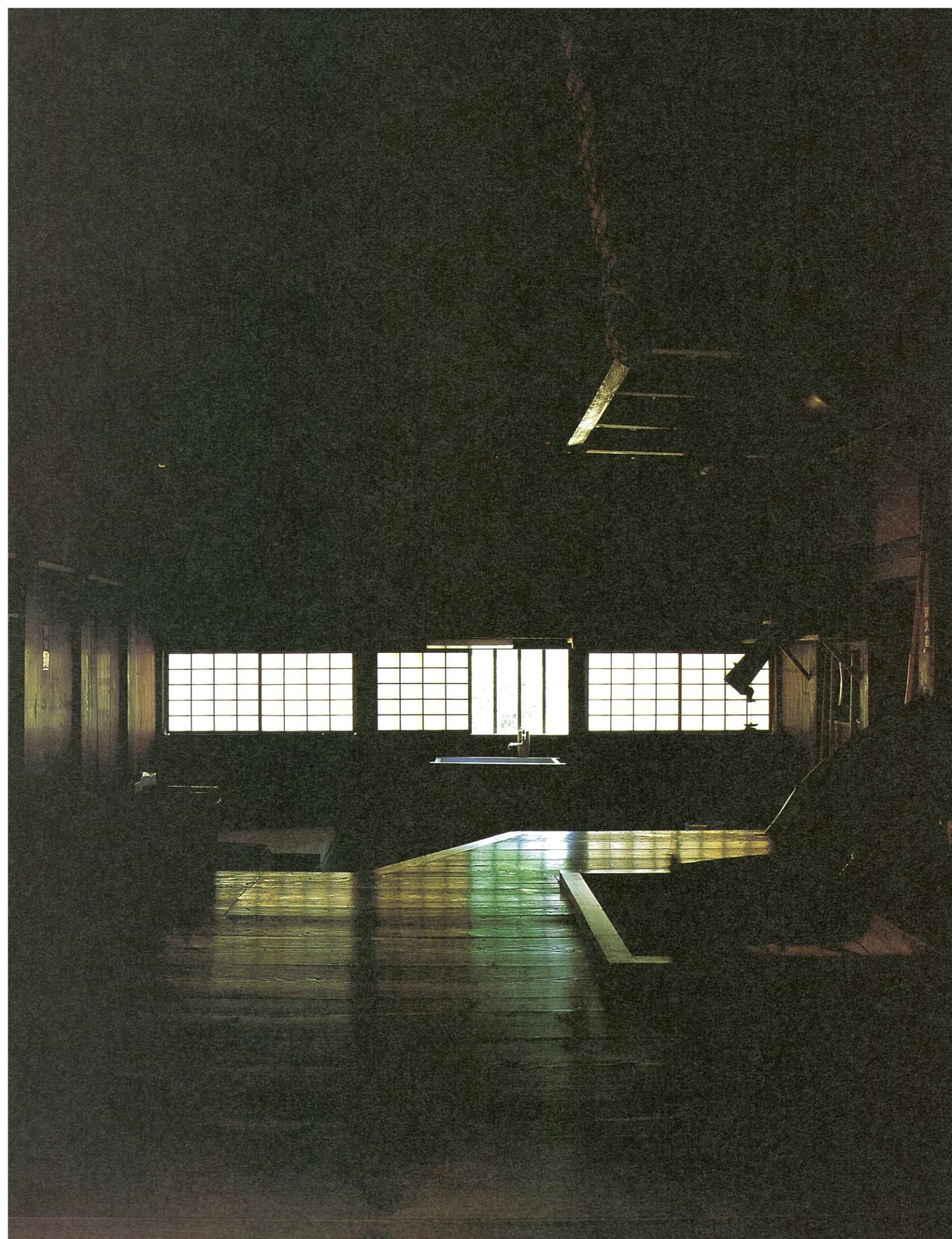


新座敷は明治30年（1897）の増築でつくられたもので、床構えは、赤松皮付きの床柱に、黒柿の床がまち、油松の一枚板の地板、大円窓など、建築当初の座敷とは趣の違う近代の特徴が見られる。





手前は対面の間で、奥が本座敷になる。
庭に面して1間の土庇を付け、数寄屋の
意匠でつくられている。縁側の建具は、
座った目線の高さをガラスにしたねこま
障子、室内の境は中抜襖になっている。





かつては、主屋と同規模の建物が写真の茶の間・台所棟を挟んでH型に建っていた。そのため、切り離された梁の木口などが外観に見えている。左の障子戸の内は台所、右は茶の間。



表門は桁行14mの入母屋造り・茅葺きの長屋門で、中央に扉口を開ける。扉左側の潜戸は敷鴨居に勾配を付けて、戸も菱形にした自動扉になっている。細かなところにも先人の知恵が見える。



主屋の右側、土間と馬屋の正面には雁木状の下屋庇を出し、深い軒をつくり出している。半間の間隔で連続する柱や、出桁腕木が見せる構造美が印象的である。



新座敷の裏側の外観で、障子戸の内側は丸窓である。木陰が障子戸にあたるとときの丸窓の風情はすばらしい。床下の換気に配慮した格子や細部の彫刻など、建物の裏側の意匠にも見るものが多い。